会長通信　Ｎｏ．１６

2016年4月1日
（一社）岩手県中小企業診断士協会
会　長　　宮　　健

目　次
１．雑感・・「人生の大病は傲りである」
２．年初からの主な動き
３．協会行事等の日程について
４．企業診断ニュース　別冊 Vol. 2
５．寄稿「岩手県協会の皆様へ」（工藤桂）
【付】新聞切抜き　2件

１．雑感・・「人生の大病は傲りである」

会員の皆さん、お元気ですか。私は2月に誕生日を迎えましたが、年齢のことは横に置いといて、相変わらず元気です。

最近、診断士に対する評価が高まり、地方公共団体や商工団体などから「診断士を紹介してほしい」という問合せがよく来るようになりました。嬉しい限りです。

もちろん受入側に選ぶ権利がありますから、「診断士なら誰でも良い」というわけではありません。これまでの経験から、結局、「人間性を見られているのかな」と思っています。

われわれ中小企業診断士は、公的な資格を有していることは紛れもない事実ですから、それなりに評価されていますが、それはあくまでも表面的なものです。最後にものを言うのは、やっぱり「人間性」です。知識・能力・経験だけでは相手を納得させることはできないことを痛感しています。お互いに（もちろん私を含めて）人間性を高める努力をしていきたいものだと思います。

最近読んだ本に、稲盛和夫は松下幸之助から「素直」「謙虚」「熱意」「感謝」などを学びとったということが紹介されていました。逆に、「傲慢」「無視」などが最も嫌われるのかなとも思います。

陽明学の教えに、「人生の大病は傲（おご）りである」という言葉があります。「順境にある時ほど傲慢になりやすい」ことを戒めています。

診断士の果たすべき役割は、中小企業を支援することですが、時には経営者に「道を説く」こともあります。そんな重要な役割を担っている自分が、相手から「あの人は人間的にどうも・・」などと言われるようでは、まだまだ修行が足りないことになります。お説教めいた話で恐縮ですが、自らの反省から得た「雑感」です。

２．年初からの主な動き

年が明けてから、すでに３カ月が経過しました。

以下に示したのは、私が主として会長の立場で参加した諸行事等（内部・外部）について、日誌風に紹介したものです。

①1月　5日（金）盛岡商工会議所　新年交賀会（盛岡グランドホテル※）
②1月　6日（土）「会長通信」Ｎｏ．15発行
③1月23日（土）　いわて実践診断士の会勉強会・懇親会（やまなか家）
④1月26日（火）　県経営支援課　グループ補助金審査会（県公会堂）
⑤1月28日（木）いわてﾋﾞｼﾞﾈｽｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝｱﾜｰﾄﾞ審査会（商工連）
⑥2月　1日（月）県建築技術振興課　建設業新分野発表会（ｴｽﾎﾟﾜｰﾙ）
⑦2月　5日（金）中央会谷村久興会長叙勲祝賀会（盛岡グランドホテル）
⑧2月10日（水）商工連イノベーションアワード審査会（ﾆｭｰｳｨﾝｸﾞ）
⑨2月12日（金）盛岡市 業務改善事例発表会審査会（プラザおでって）
⑩2月15日（月）県森林整備課地域森林経営プラン認定審査会（水産会館）
⑪2月18日（木）盛岡市市長公室 外部評価委員会（市役所別館）
⑫2月19日（金）岩手県ﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ人材戦略協議会打合せ（中央会）
⑬2月27日（土）いわて実践診断士の会勉強会・懇親会（やまなか家）※
⑭3月　3日（木）いわて産業振興センター　監査会（産業振興センター）
⑮3月　9日（水）県森林整備課 経営プラン発表会審査（エスポワール）
⑯3月15日（火）県資源循環推進課 ゼロエミッション審査会（県庁舎）
⑰3月18日（金）いわて産業振興センター理事会（産業振興センター）
⑱3月29日（火）東北財務局地域密着型金融に関するシンポジウム（仙台）

※1．カッコ内は開催場所です。
　2．2月27日の勉強会・懇親会は都合により欠席しました。

３．協会行事等の日程について

（１）理事会
　4月23日（土）10:30～正午　岩手県立大学アイーナキャンパス
　議案：平成２８年度総会提出議案について、総会開催日について　他

（２）総会
　5月28日（土）15:00～17:00　県公会堂会議室（終了後　懇親会予定）

（３）理論政策研修会
　9月3日（土）　13:00～17:00
　講師・テーマ：①東北財務局「平成28年度の中小企業施策」
　　②県農林水産部農業振興課「県の農業振興施策とＴＰＰ」
　　③中小機構「事業承継について」

４.「企業診断ニュース　Vol. 2　」について

昨年 8 月に企業診断ニュース Vol. 1「都道府県協会のイチ押し！の活動」が発行され、全国 47 協会のうち、当協会をはじめ 14 協会の原稿が掲載されています。さらに最近、Vol. 2 が発行されました。

本部の福田尚好会長の「別冊の発行にあたって」と題するご挨拶には、「中小企業診断士実務補修の受講者の方々をはじめとして、中小企業関係機関や地域金融機関、さらには大学や連携する他士業の皆様方に対し、私どもの都道府県協会における職域拡大に向けた取組みや、所属している会員中小企業診断士への人材育成事業などの特色のある協会活動内容について、広くご理解いただくことを目的としております」とあります。

今般 Vol. 2 の発行に際して、本部から再び原稿依頼を受けたので、なんとか原稿をまとめて送付しましたが、今回掲載されているのは 13 協会にとどまっています。2 回連続して原稿を寄せたのは、当協会をはじめ、埼玉、千葉、富山、福井、滋賀、大阪、香川の 8 協会で、いささか拍子抜けしています。

Vol. 2 の発行について原稿募集の話があった時に、Vol. 1 に掲載された協会以外から原稿募集をするのかと思っていたのですが、47 協会すべてに対してお願いしているということでしたので、再提出した次第です。

ともあれ、Vol. 2 の当協会のページを次ページに掲載しましたので、ご覧ください。

５．寄稿「岩手県協会の皆様へ」

前号で紹介した新入会員の工藤桂さんから、「岩手県協会の皆様へ」という原稿が寄せられましたので後掲しました。ぜひお読みください。工藤会員は神奈川県協会とのダブル加入ですが、岩手県内における実績も着実に上げております。先輩会員の皆様からのご支援も必要かと思いますので、私からもよろしくお願いいたします。

【付】新聞切抜き　２件

①　日刊岩手建設工業新聞「ズバリ寸評」　平成 28 年 2 月 10 日掲載
「中小企業診断士トップに」

②　日刊岩手建設工業新聞「ズバリ寸評」　平成 28 年 2 月 24 日掲載
「通算７００回記念です」

以　上

岩手県中小企業診断士協会
協会のモットーは「仲間意識の醸成」

プロコン向けのイチ押し！ の活動

◆協会所属のプロコンであることに誇りを持とう

「仲間意識の醸成」とは，必ずしも集まる機会を多く持とうということではありません。会員１人ひとりが，「たとえ小さなことでもいいから，協会の仲間のために自分がやれることを実践しよう」という意識を持ってもらいたいということです。仲間意識の醸成を総会の運営方針に掲げてから，２年が過ぎようとしています。この間に，会長・副会長が実践した「仲間意識の醸成」の事例をいくつか挙げてみます。

①ある業界団体のアンケート結果の集計・報告書の作成を，若手の会員と２人で実施した。
②経営指導している企業を，会員が運営する会計事務所に紹介し，契約に至った。
③大学教授を定年退官（その後，名誉教授）した会員に，副会長が事務所開設を支援した。
④県の主催する委員会などの委員に会員の推薦を依頼され，採択された事例が数件ある。

山火弘敬副会長（左）と
菅原光政理事（右）

企業内診断士向けのイチ押し！ の活動

◆日本経営診断学会の研究発表会で発表の機会を！

当協会の特色の１つは，日本経営診断学会との連携です。会長が同学会の理事・東北部会長を務めています。学会に加入している会員は３人と決して多くはありませんが，学会事務局をお願いしている岩手県立大学ソフトウェア情報学部の教授や学生（院生）たちとの交流の機会にもなっています。毎年１回，協会と同学会が共同で「研究発表会」を開催しており，研究発表をする機会の少ない企業内診断士に，毎回１人ずつ発表をしてもらうようにしています。

平成27年度の研究発表会は11月上旬に開催され，外食チェーン（本社・北上市）に勤務している会員が，「岩手県の外食産業概観」について発表しました。平成26年度は，全酪連勤務の会員が，「酪農におけるマネジメントサイクルの作り方」について発表を行いました。当日は岩手県立大学の准教授，学生からも研究発表があり，協会側と大学側から合計20人ほどの参加がありました。研究発表会終了後には，交流会も開催しました。

研究発表会で基調講演をする宮健会長（左）
研究発表をする小田島広実会員（右）

岩手県協会の皆様へ

皆様はじめまして。工藤桂（くどうかつら）と申します、岩手県中小企業診断士協会に2015年12月に入会いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、2015年9月に養成課程（日本生産性本部）を修了し、10月に診断士登録をいたしました。現在は、神奈川県横浜市在住の個人事業主で、神奈川県中小企業診断協会の会員でもあります。また、神奈川県協会登録診断士によるLLP、YKK（川崎・横浜北地域創成ネットワーク）のメンバーです。YKKは会員約30名ですが、テクニカルショウヨコハマ（http://www.tech-yokohama.jp/tech2016/）などに出展して顧客開拓をすると同時に、複数のテーマ研究をチームで行っています。特に2－3月はものづくり補助金の申請・活用に向けたセミナーや相談会を開催しており、新人診断士としては貴重な、お客様と成長戦略のお話しができる機会を得て、勉強をさせて頂いています。

出身は、岩手県田野畑村島越（しまのこし）で、実家は兼業漁家でした。大学から東京に居住し、日本通運㈱旅行事業部で国際旅行の営業を20年以上務めました。日本人の海外旅行や、外国人の訪日旅行（インバウンド）の営業・添乗を通じて、国際交流（事業系及び一般系）を行う企業様や組織様のお手伝いをさせて頂きました。お客様に、旅と言う舞台を演じて頂くため、黒子としてサービスを提供する年月を過ごす中で、観光現場の様々な企業の経営改善に興味を持ったのが、中小企業診断士資格取得を目指した背景です。また、日本企業のグローバル進出をお手伝いする業務の中で、海外企業への営業や添乗・出張の経験を活かしてJAPANブランドの発展に取り組んでみたい、という希望も持つようになりました。

震災後、旅行業を退職して経営支援の道に進む決意をすると同時に、地元の神奈川県・ふるさとの岩手県、両方での活動をしたいと希望をしたのが、神奈川・岩手ダブル入会の動機です。2014年には三陸鉄道の再開に伴う観光業復活に携わるため、田野畑村のホテル羅賀荘で1年間務め、沿岸部の観光業・食産業の環境変化を体験しながら資格学習をしました。

今年2月から、盛岡市に念願の事務所を開設しました。場所は盛岡市インキュベーションセンター、開運橋センタービル３Ｆです。岩手県では、被災地の復興支援や内陸部の企業様の観光事業発展にお役に立つ支援を中心に取り組みたいと考えております。ビギナーズラックで、岩手県でのお仕事を二つ頂く事ができました。沿岸部ホテル様のご支援、農事業者様向けのセミナー『販路開拓としての食と観光～WASHOKU IN IWATE』です。今年は震災から5年目となりますが、観光の復興はまだまだこれからです。岩手の食や観光を高品質なJAPANブランドとして世界に発信していくために、微力を呈したいと思います。

今後は、県協会の諸先輩にお教えを乞う事も多いと存じますが、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、自己紹介の機会をお借りしてお願い申し上げます。

工藤桂拝（2016年2月）

宮健（ミヤケン）の

新・ズバリ寸評

▼439▲

宮健氏

中小企業診断士トップに

旧聞に属しますが、表題に掲げたのは、1月12日の日経新聞の記事の見出しです。サブタイトルには、「取得したいビジネス関連資格～本社調査～」とあります。中小企業診断士（以下、診断士）の資格保有者の一人として、なんとも嬉しい限りです。

この調査は、「日本経済新聞社と就職・転職情報サービスの日経HR共同で、ビジネスパーソンを対象に『新たに取得したい資格』（語学検定含む）を調査した」もので、「インターネットによるアンケート方式で実施した」とあります。回答者は主に20～40歳代で、903人（男性703人、女性200人）から回答を得たということです。

その結果、診断士がトップ（回答割合は16％）で、「前年の6位から大きく順位を上げた」と記事にあります。2～4位には語学検定が続き、5位に宅地建物取引士（取引主任から取引士に変更）が入っています。以下、日商簿記検定2級・3級が6～7位、さらに語学検定（8～9位）と続き、10位はビジネス実務法務検定准1級・2級となっています。以上がベストテンです。

首位となった診断士についての説明では、「経営コンサルタントとして唯一の国家資格で、中小企業の経営診断・助言を担う。合格率約4％と難易度は高いが、経営全般に関する知識を習得できるため会社員や公務員など幅広い業種で人気を集めている」とあります。

昨年4月に、診断士資格取得50年の節目を迎えたわたしにとっては、まさに隔世の感があります。わたしが受験したのは、試験制度ができて2年目のこと（1964年、登録は翌年）で、受験者は全国でわずか523人（最近は毎年約2万人）でした。一次試験、2次試験とふるいにかけられ、最終的な合格率はひと桁台の狭き門でした。岩手県人はわたしだけ（前年も1人）で、全国的に見ても、最古参の一人となりました。

わたしは資格取得後も岩手銀行勤務（経営相談所長、中ノ橋支店長など）を続け、東京の会社に出向後数年を経て岩手に戻り、盛岡に経営コンサルタント事務所を開設したのは60歳の時でした。それから23年の歳月が流れようとしています。

正直言って、診断士の知名度は決して高くありません。わたしは長年にわたって、診断士および一般社団法人岩手県中小企業診断士協会（会員40人弱、わたしが会長）の知名度アップのために努力してきましたが、残念ながら、「いまだ道半ば」です。

もちろん社会に認知されるためには、診断士自身が研さんを積み、信頼される存在にならなければなりません。結局、最後にものを言うのは「人間的魅力」です。これは診断士に限ったことではなく、企業経営者にとっても同じことです。

最後に私ごとで恐縮ですが、2月はわたしの誕生月です。まだまだ若いつもりで頑張っていますので、よろしくお願いします。

（中小企業診断士）

28.2.10

宮健（ミヤケン）の

新・ズバリ寸評

▼441▲

宮健氏

通算700回記念です

新・ズバリ寸評は今回で441回ですが、その前の「ズバリ寸評」から通算すると、ちょうど700回となります。毎週1回書くと年間50回ほどになりますから、700回ということは、中断をはさんで14年間書き続けてきたことになります。

ズバリ寸評の第1回は、平成9（1997）年10月1日の「借金の分岐点を考える」でした。その書き出しに、「水沢市の丸伊工業の事実上の倒産は、県南地方だけではなく岩手県内全域にいろいろな波紋を投げかけている」とあります。当時はバブル経済破たん後の不況が始まって数年を経たころで、県内でも、倒産企業が相次いでいました。

第1回の「ズバリ寸評」をさらに読み進んでいくと、丸伊工業が「年間売上高を上回る借金を抱えていた」と新聞が報じていたことを紹介しています。そして借金の分岐点は、「ずばりいえば『年間売上高』の半分である」と書いています。

この、「借金は年間売上高の半分」というのは、銀行員時代以来抱き続けているわたしの信念です。銀行退職後も、中小企業診断士として多くの企業の決算書を見てきましたが、この信念は、さらに確固たるものとなりました。借金が多いと、当然のことながら支払利息が利益を圧迫し、返済財源の捻出が、資金繰り操作に重くのしかかってきます。

もちろん業種特性や、タイミングによる特殊要因などもあるので一概には言えませんが、まずは一つの目安になることは確かです。

この第1回から5年3カ月ほど経った平成14年12月25日（259回）をもって、「ズバリ寸評」は中断します。最後の回の表題は、「仕事はゼロにはならない」というもので、「いくら公共工事予算が減少しても、決してゼロにはならない（中略）。あとは各企業の努力次第である」と書いています。

28.2.24

当時は、そういう時代だったのかと、懐かしく読み返しています。1回から259回までの掲載文は、「ズバリ寸評」「続・ズバリ寸評」の2冊の著書に収録されています。

しばらく中断ののちに、「新・ズバリ寸評」として平成19年4月に再開しました。再開第1回の表題は、「長らくご無沙汰しました」で、ご無沙汰を詫びるとともに、政府の公共投資予算減少をテーマに書いています。

この年は、アメリカで住宅ローン会社の倒産が相次ぎ、翌年のリーマンショックの引き金になりました。リーマンショックは、地方経済にも多大の影響をもたらしました。そして20年6月には、「岩手・宮城内陸地震」が発生したことも忘れられません。

さらに3年後の23年3月11日、東日本大震災に見舞われました。震災後1年間に書いた「ズバリ寸評」50編をまとめて、「東日本大震災編」として出版しました。

700回を期に、改めまして読者の皆様に感謝申し上げます。これからもご愛読のほどを、よろしくお願いいたします。

（中小企業診断士）